「日々の理科」（第 2453 号）　2021,-3,30

「フキノトウの観察（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

久しぶりに、北軽井沢の山荘に数日間滞在している。毎年３月下旬には、残雪があることが多いのだが、今年はすっかり雪はなくなっていた。

スノーシュー（西洋かんじき）をはいて歩き回っていた裏の森も、まったく雪が残っていない。このあたりは５月に入っても雪が積もることがあるが、今年はこのまま春を迎えそうだ。しかし、地面をスコップでたたくと、数センチ下はまだ凍っていた。

この時期の浅間高原は面白くない。雪もないし、ヤマザクラやコブシもまだ咲いていないからだ。焚き火のあとは「なんちゃって・キャンプファイアー・サークル」なのだが、栃木の山火事のあと、恐れをなして一度も使っていない。ここで「焚き火コーヒー」というのをやってみたいと思っている。まだ完全に「冬枯れ」の風景に見えるのだが、このサークルの近くで、ちょっと春らしいものを見つけた。

カラマツの落ち葉が積もった地面から、リーフ・グリーン（薄緑色）のものがポツポツと見えている。「フキノトウ」のようだ。

裏庭の森の中でも、この場所はちょっとした「窪地」になっていて、雨が降ると小さな湿地のようになる。毎年フキが繁茂するのだが、早春にフキノトウが見られるのだ。去年は天ぷらにして食べた記憶がある。

このような地面すれすれの対象物を撮影するには、一眼レフカメラよりも、意外とスマホが役立つ。写真尾ような構図で撮ると、背後の森も写って、季節感のある写真になる。マツボックリも今の季節にたくさん落ちるので「早春らしさ」を表現している。